

死にそうな孤児でした

転生したら

5回目の人生、

2

Kou Sasaki
佐々木 鴻

ill. でかるこ



Characters

一章 草原に戸惑う

階層型ダンジョンにおいて、階層ごとにまつたく別の景観が広がる事例は、珍しいことではない。だが、それはあくまでもそのダンジョンに関連した景色——たとえば迷路のような洞窟から地下大空洞になる、地底湖になる、といった変化だ。

間違つても、まつたく関連のない場所に出ることはありえない。

今、ナディイの目の前に広がる光景はその常識から逸脱していた。

地下坑道を進み、四十三階層に続くはずの階層門を抜けた先。

そこは晴れ渡った蒼穹^{そらきゆう}が広がり、柔らかな風が全身を撫^{なな}でるように吹^ふき抜ける草原だった。

(えーと、どうしてこんなことになつたんだつけ？)

我が家が身に起こつた事態が想像の埒外^{らばい}で、理解が追いつかずに呆然^{ぼうぜん}とするナディイ。

それは彼女とともに来たレオノールやヴァアレリーも同様で、まつたく同じように呆然としている。だが、いつまでも嘆然^{あせん}としているわけにはいかないのも事実。

とりあえずナディイは、現状を把握するべく自身のこれまでを振り返ることにした。

現在ナディイがいる場所は、『クリスタ・マイ』^{クリスタ・マイ}という階層型の迷宮^{ストラクチャ}だ。

鉱山が迷宮と化した『結晶鋼道』に挑む冒險者は、入り組んだ迷路のような坑道を進むことになる。

なぜそんなところに潜行したのか。

妹分であるレオノールと幸せに暮らすための家を建てるべく、材料を集めに来たからだ。

妹分という言葉どおり、レオノールはナディの実の妹ではない。ナディが五歳のとき、当時の住処だった貧民街の廃屋前で息絶えようとしていた女性から、生後間もないところを引き取ったのである。

貧民街で生活する五歳の少女が、生後間もない赤子を引き取つて育てられるのか。間違いなく不可能だ。

しかし、ナディには、その不可能を可能にする力があつた。

なんと彼女は四度もの転生を果たしており、今にも死にそうな孤児に転生して記憶を取り戻した今回が、五回目の人生だつたのである。

一回目は、別の世界から転移者。

二回目は、災厄童さいやくわうを屠ほふつた赤金髪スルベアロードの魔物狩り。

三回目は、女魔法使いにして薬師ノン・ザ・レス——本人は薬師が本業だと言い張つていたが、ともかく。

四回目は、『不滅の魔王』を単独撃破し、最終的にはその魔王に見初められて妃みわいとなつた冒險者。ナディは、それらの人生におけるすべての記憶と技術を身につけていた。

まさしく強くてニューゲームである。

そうして一緒に暮らし始めたナディとレオノール。隣人の助けもあり成長した彼女は、レオノールとより安定した生活を送るため、冒險者になることを決意する。

冒險者登録可能な十二歳になり、晴れて冒險者となつたナディは次々と依頼をこなした。自身の実力が、一般的には規格外と呼ばれるほどのものであることなどお構いなしに。

ナディは現在の主流である魔術ではなく、ヒト種の間では失われて久しいとされている魔法——【逸失魔法】ロストソーサリーを使えた。そんな彼女の教育を受けた、レオノールも同様である。

二人の規格外の活躍ぶりは、冒險者ギルドのガチムチなマスター……シユルヴエステルを悩ましていた。

そうして暮らすこと五年。ナディはとあるきっかけから、妹分のレオノールが前世で早世そろせいした実の娘むすめの転生体であることを知る。

ついでに前世も今世も多分その前の人生においても、ナディがわりとうつかりさんであつたとも判明したが、それはともかく。

今世こそ一人で幸せになるため、ナディはまず「裏庭には二羽、庭には二羽のニワトリを飼える家」を建てようと計画した。

なぜニワトリなのか。特に深い意味はない。完全にナディの趣味だ。

そうして建材を求めて『結晶鋼道』へ潜行した一人は、調子に乗つてどんどん奥へ進んだ。実は迷宮が氾濫はんらんしていたことなど、まったく気付かず。

『結晶鋼道』のその時点での最深層……四十二階層までやつてきたナディたちは、ボスである女王

アリ——セレストアント・クイーン率いるアリの大群と対峙する。

無数に湧く魔物、その数の暴力に追い詰められて絶体絶命に陥つたとき、彼女たちと同じく迷宮氾濫に気付かず潜行していた黒衣の男……ヴァレリーに助けられた。

彼の能力は凄まじく、フロアを埋め尽くすほど湧くアリを【剣の墓標】であつという間に殲滅させた。

【剣の墓標】は『不滅の魔王』の十八番だった固有魔法だ。

そう、ヴァレリーは前世のナディの夫であつた、魔王ヴァレリアの生まれ変わりだつたのだ。前世と同じように熱烈に、場所を弁えずに求愛するヴァレリーに戸惑うナディ。

お互いの状況を確認し合つた二人は、ひとまずそんなことをしている場合ではないと話をまとめ、レオノールとともに未踏の四十三階層に進むことにした。

そして冒頭に戻る。

(……なんていうか、思い返すとわりと濃い生活を送つてゐるわね)
しみじみと感慨に耽るナディであつた。

(私はただ、家を建てて裏庭と庭に二羽ずつニワトリを飼いたいだけなのに！)
目標は変わらないが、早くしないと目的がずれそうだ。

ともかく。

地平線のはるか彼方まで続く草原を目の当たりにして、しばし呆然とした三人がまずしたこと。

「どりあえず、お腹空いたから何か食べよう」
それは、空腹を満たすことであつた。

「お姉ちゃんに賛成。『結晶鍋道』で食材はたくさん拾つたから困らない」

「わあ、アデリーレ……じゃない、ナディの手料理は久し振りだ。楽しみだなあ」

わけの分からぬ状況に放り出され、慌てるほど纖細な三人ではない。脅威が迫つていないと判断したからこそ、これほどのんびりできるのだろう。

数々の修羅場をくぐってきた、元魔王と元魔王妃ともあろう者が、見知らぬ場所にやつてきてしまつた程度で慌てるはずがない。

残るは経験が浅いレオノールだが、落ち着き払つてゐる前世の両親を見てまだ慌てる時間じやないと判断したのか、こちらも落ち着いている。

ただ、彼女は念のため空に向けて魔弾を数発打ち上げて様子を見ていた。

ヴァレリーは魔弾の行方を感慨深げに見つめて、首を傾げたり頷いたりしている。

ナディはというと。

【煉瓦生成】【道具生成】

魔法で煉瓦を作成して竈を作り、ついでミスリル鉱石で鍋や調理道具、食器を作り出した。
なぜ貴重なミスリルを使つたのか。

理由は単純で手元に銀がなかつたからだ。ミスリルはカテゴリーとして銀に属するため、ナディはなんの考えもなく「銀食器がいいなあ」と判断して加工した。

この場にガチムチなギルマスことシユルヴェステルがいたら、確実に怒られていただろう。

相変わらず、世間一般の常識から相当外れている。

【クリンネス】
【清浄】

【水生成】

【常設炎】

……

魔法で鍋を洗い、水を張つて火にかける。

少し思案した彼女は、【収納】^{ストレージ}からドロップ品である金色のサケ……ゴールドトラウトを取り出した。

「ヴァル、これさばいて。あなた好きでしょ」

【アデライド】魔王妃時代の記憶に残る魔王の好物をすすめる。ツンツンしつつもそういう気遣いをするところが、元魔王様のハートを驚撫みしているのに気付いていない。

そんなナディにいつも何度もズキュウウウン！ しちゃう元魔王様のヴァレリーは、満面の笑みを浮かべた。

「ああ、もちろんアデリー——じゃないナディが大好きだよ」

「聞いてるのは食べ物の好みなんだけど？」

見当違いな発言をしてナディを呆れさせる。ある意味で特異な才能だ。

「はは、冗談だよ」

そう言い、爽やかな笑顔を見せるヴァレリー。

そんな彼をナディは、「絶対に嘘だろう」と言わんばかりのジト目で見る。ちょっとした仕草が魔王様の性癖に直撃するのに、やっぱり気付いていない。

ツツコミ「どころが難しい会話をしている二人を見て、ちょっと嬉しそうなのはレオノールだ。元娘として、かつての両親の仲がいい姿に満足する。現妹分としては少々複雑な心境だけど。

「今生の私は、あんたと恋仲になるつもりはないし、なりたくもないわよ。初対面なのにいきなり抱きついてくる変態に、どうやつたらそんな気持ちが芽生えると思つてるのよ」

「……ああ……相変わらずつれないね、ナディ。そんなキミを心から愛しているよ」

ナディのすぐない態度をまったく意に介さず、飄々とそんな言葉を吐いては盛大にドン引きされるヴァレリーである。元魔王なのに別の意味で勇者だった。

「相変わらずT P O全無視のお父様。そんな様子だからお母様がデレられなかつたと分かっていい。さすまお」

「そんなに褒められると嬉しいじゃないか」

レオノールがため息をついて反省を促すが、理解を得られなかつた。ヴァレリーはものすごくいい笑みを浮かべている。

「それと、レオ。今生のボクのことは、兄と呼んで構わないよ。十中八九、キミはボクの継母だつたレオノル様の娘……つまり、ボクの腹違いの妹で間違いないんだろう？」

「違います。勘違いです。他人の空似です氣のせいです」

確信をもつて問うたヴァレリーに、即座に否定を返すレオノールである。

十中八九どころか、彼が言うレオノルとは間違いないよ。十中八九、キミはボクの継母だつたヴァレリーの生家——ファルギエール侯爵家に嫁ぐも、恋敵たちの策略によつて命を落とした母。

十二年前に護衛とはぐれながら重傷を負つて貧民街に辿り着き、当時五歳で前世の記憶を取り戻したばかりのナディに自分を託した那人。

しかし、そう認めてしまえばファルギエール侯爵家に連れ戻され、ナディと離れ離れになつてしまふかもしれない。それは嫌だ。

「ボクは十一年前——五歳のときに【魂の継承】を起こして魔王の能力を覚醒させたんだ。種族としての覚醒は十全ではないけど、能力はおおむねヴァレリアだつたときと同じだよ。だから分かる。レオはクソ親父おやじとレオノル様の血を引く子だつて」

レオノールの否定に頷いたヴァレリーだが、それでも続けた。

彼の中で、レオノールが腹違いの妹であることはすでに確定しているのだろう。

「……もしその推察が事実だとして、あんたはどうするの。レオを連れて家に戻るつもり?」

冷え切つた表情でナディが言う。レオノールがわずかに肩を震わせた。

果たして、ヴァレリーの返答は——

「好きにすればいいんじゃないかな」

どうしてそんなことを聞くのかと言わんばかりに、首を傾げている。

これにはさすがのナディも啞然とした。

「クソ親父がどうしたいかは知らないしどうでもいいけど、ボクとしてはレオノル様の顛末ひたまつを知れて、おまけに可愛い妹がいたという事実が分かつただけで満足だ。しかも、それが前世で早世した娘の生まれ変わりなのだから、これほど嬉しいことはないよ」

「え、あれ? 思つてた反応と違う。てっきり、家に連れ戻すのかと思つてたわ」

「クソ親父はともかく、ボクたちきょううだい……ああ、ボクは兄が一人と姉が一人いるんだけど、そんなことはしない。レオの実力を知った戦闘狂なバカ兄が『手合させしたい』とか妄言わうごんを吐くかもしれないけどね。それと、礼節を重んじるフロランス姉上は一度家に招きたがるとは思う。でもよほどのことがない限り、自由にすればいいよ」

なんの問題もないとばかりに、ヴァレリーが答える。懐が広いというか、度量が大きい。

(そういえば昔からそうだったなあ。事務作業は一切できなかつたし、変態だつたけど、確かに王の器うつわだつた)

ナディは前世を回顧する。なお、ヴァレリーは前世も今世も変態扱いだ。

「それなら問題なさそうね。じゃあ、食事の用意をしましよう。ほらヴァル、早くゴールドトラウトをさばいてよ」

「その提案はすごく魅力的だよ。でも残念ながら、ボクは武器はおろか包丁すら扱えない身体なんだ」

今生におけるヴァレリーの二つ名は『武器碎き』。刃物をはじめとするあらゆる武器が、彼から漏れる魔力に耐え切れずに自壊じかいしてしまうがゆえに付いた二つ名である。

「知らないわよそんなこと。これを貸してあげるから、早くしなさいよ」

ナディが付与でバフをマシマシにした短刀を包丁代わりに渡す。

ヴァレリーは、「ナディの持ち物を壊すのは忍びない」とブツブツ言つてフリーズしていたが、

半眼はんがんでジトツと見つめる彼女に促されてサケに手を伸ばした。

そこでナディイは気付く。

「あ。ごめんなさい、ヴァル。その短刀、【専用化】エクスルーシブ化」を付与したから、私とレオしか使えな——」「すごいよ、ナディイ！ この短刀はボクが使つても壊れない。ボクから漏れ出る魔力に耐えられるよ」

ところが、短刀は壊れもせずに抜群ばつぐんの切れ味を見せていた。手に馴染なじむようで思いどおり扱えている様子だ。

「……え？ そう、なんだ。おつかしいなあ。確かに付与したと思ったんだけど……」

「あれ？ この短刀には本当に【専用化】エクスルーシブ化」が付与されているね」

「あ、うん。だから使用者が限定されていて、私とレオしか使えないはずなんだけど……おつかしいなあ」

不可解な現象に首を傾げつつ、あとで魔法付与設定の確認をしようと思うナディイだつた。

それを尻目に、ヴァレリーは左手で持った短刀で丁寧にサケをさばいていく。躊躇ちゅうりょなど一切ない、職人並みの見事な腕前である。

「短刀を使えるのも驚きだけど……、あなた、貴族に生まれたくせにさばくの上手ね。多少下手でも許容範囲きょゆうはんい」だと思ってやらせたのに」

真剣な表情で作業するヴァレリーに感心しながら、ナディイは意外と早く煮立にたった鍋を見てわずかに首を傾げた。

「ふふ。何を言つているんだい、ナディイ」

ヴァレリーは柔らかな微笑みを浮かべると、額ひたいを腕で拭い……

「愛の力だよ」

イケボささやくようになぞ言つた。ちなみに、汗あせはまつたくかいていない。

「付与の不具合だと思うけど？」

案の定、即座に反論されている。

イケボにちよつとキュンとしちゃつたが、知らん顔つらぬを貫くナディイであった。

一尾まるごとさばき、達成感で爽やかに額を拭うヴァレリーを見なかつたことにし、ナディイはアラを使つて汁だしを取つた。

それを濾したスープに、【収納】ストレージに入れておいた下揃え済みの根菜を数種類加える。さらに、ヴァレリーから提供された葉物野菜も適度に切つて投入し、煮込み始めた。

その隣では、レオノールがサラダを用意していた。ゴールドトラウトの白身部分を刺身にし、野菜と和えてドレッシングで仕上げている。

ヴァレリーもメイン料理の調理を進めていく。彼は中トロから大トロ部分に塩胡椒しおこしょうを振ると、表面を焼き色がつく程度に焼いてバジルソースをかけた。なかなかの手並みだ。

(そいいえば、前世では私と一緒に料理していたわね)

なんとなく過去を懐かしむナディイであった。口元がちよつとニヨニヨしてしまつたのは、調理が上手にできたからだろう。

「……ところであんた、どうしてこんなに生野菜を持ってるのよ。菜食主義者だつたつけ？」
当然とばかりに【収納】から新鮮な野菜をひょいひょい取り出していたヴァレリーに、ナディがそう尋ねる。

すると彼はちょっと困った顔をした。

「ボクが外出するときには、いつもいつも従僕のギャス・パルが付きまとつてくるんだ。彼が消耗品や食料を用意してくれるんだけど……なぜか回復薬や保存食の類は一切なくて、生肉や鮮魚、生野菜とかの生鮮食品ばかりを買つてくるんだよ。なんか、ボクにはそれで十分だつて言つて」
「……あー。あんた、魔王の頃から状態異常には絶対かからないしねー」

「まあね」

魔王の特殊能力ゆえか、能力を覚醒させた今、彼も状態異常にはならないらしい。

前世で起きたヒト種連合と魔族との戦争では、毒殺などの搦手で魔王暗殺を狙つた者たちもいたが、ことごとく失敗していた。

それを見て「ふくすー」と笑つたことを思い出し、ナディはまたしても一人でニヨニヨする。
そもそも迷宮に潜行しているときつて、セーフエリアじやない限り調理なんてほぼできないよね。あいつ、全然分かつていらないんだよ」

出立前に、手のひらを下向きにして拳手敬礼しながら「いつてらつしやまつせ！」とおかしなトーンで送り出してきた従僕を思い起こし、ヴァレリーは苦笑する。陸上なのに、なぜ海軍式の敬礼をしたのか。

「じゃあ、今まで迷宮に潜つたときはどうしていたの？」

なんだかちょっと可哀想に思えてきたナディが聞くと、彼は遠く蒼穹を見上げる。

「生野菜を齧つてたよ……」

「そう……あなたも大変だったのね……」
美味しいものを作つてあげようと思うナディであつた。

そうして完成したサーモンのムニエル／バジルソースがけ／や、スープやサラダを詰みつつ、ナディは【収納】から白パンを出して二人に配つた。

このパンは現在利用している、冒險者ギルドの社宅を兼ねた宿の朝食ビュッフェの残りである。足が早いために廃棄されるぶんをもらつておいたのだ。

本来ならば衛生面の問題で食品の譲渡は禁止されているのだが……、厨房スタッフたちがナディとレオノールの境遇に同情したのと、所持するマジックバッグが時間停止機能付きの高性能な品だつたため、特別に許可されたのである。

なお、その他の理由として、総料理長（独身）が数年前、まだ七歳だった頃のレオノールから「料理長ありがとう」と笑顔で食事のお礼を言われ、キュン死しそうになつたことも挙げられる。

現在、彼がかぶるトックの裏面には『可愛いは正義』と刺繍されているとかいないとか。
こうして、ピクニックよろしく食事を楽しむ三人。ナディは自分が作ったスープを飲み、首を傾げた。

やがてそれぞれの空腹が満たされた頃、草原で気持ちよく昼寝をしたい欲求に駆られながら、ナディは現在の状況に関する相談を始めた。

「ここって、いつたいどこなんだろね。私たち、確か迷宮にいたわよね」

やはり疲労には勝てず、食器をそのままに地面にひっくり返る。柔らかな草が身体を包むクッションのようで気持ちいい。

「そう。レオたちは迷宮にいた。でも階層門をくぐった途端にここに来た」

「考えられるのは強制転移だけど、おかしいんだよ。転移特有の魔力の流れを感じなかつた」

魔王は常に強力な魔力を身にまとっている。それによって、より鋭敏に周囲の魔力の動きや指向性を把握するのだ。

その力は、ヴァレリーがヒト種に生まれ変わった今も変わりないらしい。

(まあ、魔力の流れをごまかす方法はいくらもあるんだけどね。説明すると長いし、黙つてよ)

「なるほど」と神妙に頷きながら、そんなことを考えるナディである。例によつてヴァレリーは気付いていない。

「断定はできないけど、ここは『結晶鋼道』の階層ということかしら。それにしても気持ちいいなー。疲れているからこのまま寝ちゃいそうだわ」

横になつたまま空を見上げ、真剣な表情で不眞面目なことを言う。

「うん。可能性としてはあると思うね」

そう言いながら、さりげなくナディに添い寝しようとするヴァレリー。身の危険を感じたナディ

はコロコロ転がつて距離を取り、大の字になつて思案した。

露骨に避けられて落ち込み、膝を抱えている元魔王については気にしない。

ナディは知らないことだが、社交界でのヴァレリーは「無表情でクールな美丈夫だ」と評判だ。

そんな彼にこうした意外な一面があるのだと貴族令嬢たちが知つてしまつたら、きっと落胆することだろう。ギャップ萌えに目覚める可能性のほうが高いかもしれないが。

「でも謎。上空に魔弾を撃つてみたけど天井にぶつからなかつた。ダンジョンだつたら領域型でも必ずあるはずなのに。それに大気中の魔力が希薄。レオはお姉ちゃんのステップがちょっとぬるかつたことも気になつていて」

まだ鍋に残つてゐるステップをミスリル製のスプーンでくい、思案顔になるレオノール。非常に大人びた表情だが、まだわずか十二歳である。

前世込みだと二十八歳になるのだが、それを言つたらナディやヴァレリーは數えたくないくらいの年寄りだ。

「そうだね。レオが撃つた魔弾は上空五百メートルくらいにまで到達してた。領域型ダンジョンの天井は高くて百メートル弱しかない。『結晶鋼道』のような階層型の迷宮の天井は、それよりも低くなるはずだから……レオの言うとおり、大気の魔力濃度も低いし、ここはダンジョンではないのかもね。ギミックつて可能性もあるけど、これほど大規模なものはない」

ナディに避けられて落ち込みながらも、ヴァレリーはそう分析する。冷静な指摘と格好が一致していないが、それを気にする者は誰もいない。

「基本的に、ダンジョン内では魔力濃度が外より絶対に高くなるからね。ここでの濃度はそうだな……おおむね、グランツ王国の半分以下かな」

膝を抱えたヴァレリーが、ナディに寂しそうな視線を向けてそう続ける。

そんな目を向けられても、身の危険を感じたナディがほだされることはない。

「……グランツ王国、か……」

彼女は足を振り上げて勢いをつけると、上半身を起こした。額に手を当てて思案する。

そして顔を上げると、真剣な表情でレオノールとヴァレリーを見つめて口を開いた。

「どこ、それ」

「……お姉ちゃん……」

「……ナディ……まあ、うん、昔から細かいことは一切気にしなかったから、いいと言えばいいんですけどね」

さすがにそれはないと非難された。ナディにとつては不本意な反応である。

「え？ なんで？ 生きていくのに地名や国名を覚える必要ある？」

ある意味では真理を突いているのかもしれないが、一般的な社会生活を送るためには必要だ。

「お姉ちゃん。もしかしてだけどレオたちが住んでいる国や冒險者ギルドの所在地も知らないの」

「うん、知らない。どこにも書いてないし、教わった気がするけど忘れたわ」

「お姉ちゃんはやっぱアデライドお母様だった」

「そうだね。ちっちゃいことは気にしないと言いながら、わりと大きなことも気にしていなかった

からね」

二人から言われているが、そんなのどうでもいいよね？ とばかりに気にしないナディであった。

よくも悪くも相当図太い。知識の偏りがハンパなく、一般常識に乏しいのは前世からだった。

「そんなちっちゃいことなんて気にしないわよ。ふつちやけ、普通に生きて生活するのに、国の場

所なんてゾーでもいいでしょ。気にするのは権力者とか政治家だけよ」

魔王妃時代、各国との折衝で散々いやあな思いをさせていただけ経験があるからか、ナディの評価は低かつた。

実際はそういう権力者ばかりだけではないのだが、いるところにはいるのも事実であるため反論しづらい、そんな現お貴族様なヴァレリーである。

もつとも、彼はナディが大好きで何があつても全肯定すると決めているので、思うだけに留めていた。

「そんな些事より、もっと大変なことに気付いたわ」

四つ這いでノソノソと竈に近づいたナディが、真剣な表情で鍋を覗き、レオノールたちに視線を向けて言う。

それに何を感じたのか、同じく鍋を覗き込んで次の言葉を待つ二人。

果たして、ナディが気付いた大変なことは……

「ちゃんと煮立たせたのに、レオの言うとおりスープがぬるい」

「そつちのほうがどうでもいいのでは？」とツッコまれそうではある。

だが、この指摘が何を意味するのか、察しのいい二人はすぐに気付いた。

「ふむ……そういうばかよつと呼吸がしづらい気がする。もしかして、ここって標高が高いのかな」

「水の沸点が大体八七度。よつてこの場所の標高は四千百メートル以上だと思われる」

「おお、即座にそこまで分析できるのはさすがだ。それでこそボクの娘で妹。愛しているよ、レオ」

「なんかくすぐつたいから止めて」

愛しているなんて言われ慣れていないレオノールが、居心地悪くそう返す。

「照れなくていいんだよ、レオ」

しかし効果があるはずもなく、ヴァレリーのメンタルタフネスがとんでもないと証明されただけであった。

「んー……調べてみるか【飛行】

二人の様子を見ていたナディイは、言うが早いか、飛行魔法で垂直に飛び立った。

【魔法範囲極大化】【望遠視】【広角視】【敵性感知】【探知】【鑑定】

あつという間に上空三百メートルほどの高さまで舞い上がり、魔法効果を極大化させたうえで自身の視覚に望遠と広角視を付与。地上の状況を調べていく。

普段であつたなら、それはなんてことないどおりの魔法の行使のはずだった。

「あ、やば……」



だが、現在のナディイは、本人が自覚している以上に消耗していた。また、この場の魔力濃度が低く、外部魔力の利用が難しいことも災いした。

結果、彼女は唐突な魔力切れを起こした。

魔法の効果が消失した瞬間、ナディイは真っ逆さまに落下し始める。上空三百メートルからろくな強化もせずに地上にぶつかれば、間違いなく命を落とすだろう。

そのまま影を目の当たりにして、言葉を失って固まるレオノール。

一方のヴァアレリーは真剣な表情でナディイを見上げ、両手を掲げた。

【柔らかい領域】

呟くヴァアレリーに応じるように周囲の影が蠢き、上空に影の塊うごめを生成する。こうしてできた影のクツションは落下するナディイの身体を柔らかく受け止めて、落下の勢いを相殺した。

そのまま影を突き抜けたナディイは、ヴァアレリーの腕の中に納まる。

「えつ？ あ、りがとう」

予想外の出来事にちょっと驚いていたナディイは、安堵あん堵した様子のヴァアレリーを見上げて礼を言つた。

だがすっぽりと、それが当たり前であるかのように姫抱ひめいつこされている状況に気恥ずかしさを感じたらしい。

「いやあ、さつき神装魔法使つたばかりなの忘れてたわ。失敗失敗。自分で思つてはいるより消耗していたなー。あとここつて魔力が薄いから、自前の魔力を使うしかないんだよねー。探索範囲を広

げすぎてちょっと枯渴こかつしたわ」

目を泳がせたナディイが、早口で言う。だが、さすがにそれで不調をごまかせるはずがない。

半眼で見下ろしていたヴァアレリーは、ため息をついてから彼女を地面に下ろした。

魔力が枯渇して疲勞困憊ひろうこんぱいだつたせいで、ナディイはその場に座り込んでしまう。

「お姉ちゃん無理しちゃダメ。ちゃんと慎重しんちように行動して」

ナディイの腕を掴んで立ち上がりながら、俯うつむきがちのレオノールが呟くように注意した。いつも

は人形のような無表情なのに、今はちょっと泣きそうな顔をしている。

「うん、心配かけてごめんね。確かにうつかりしてたわ。次はちゃんと気を付けるから、そんな顔しないで」

レオノールの頭を撫でながら、ナディイは猛省もうせいした。

すると、そんな彼女の背後から、突然ヴァアレリーが抱きついてきた。

「ちょ！ いきなり何する——」

【魔力移譲】【完全回復】【体調維持】

ヴァアレリーと密着した箇所から、温かな魔力が注ぎ込まれる。

それが徐々にナディイの身体を満たしていく中、ついで発動した回復と状態維持魔法が疲れた身を癒やし始めた。

「無理をしちゃダメだよ、ナディイ。キミの命はキミだけのものじゃないんだ。それにキミに何かあつたら、レオもボクも悲しい気持ちになるのを忘れないでほしい」

ナディの肩に頭を乗せ、耳元で囁くように諭すヴァレリー。当然、イケボだ。

「あ、えーと……うん。分かったから、私が悪かったから離してほしいんだけど……ほら、レオも見てるし……」

耳元で囁かれ、ナディが恥ずかしそうに身をよじらせる。

助けを求めてレオノールを見るが……

「お空がとつても綺麗。明日もきっと晴れ」

空気を読んだ彼女は知らん顔をして、あらぬ方向を向いていた。

思わずサムズアップするヴァレリーである。

だが、それに鋭く気付いたナディは、普段の勝気さを取り戻した。「いつまで抱きつくのよ！ いい加減に離れなさいよまつたく！ 知らん顔するレオにサムズアップしてたの、見えてたからね！」

「えー、もうちょっと……」

『えー』じゃなくて！ いいから離れなさいってば、いつまでハグしてるつもり!?』
『できればずっと……』

ナディはまずと抱きついているヴァレリーの腕を掴み、前に倒れるよう重心を移動させる。

そして前屈みになりながら己の左足でヴァレリーの右足を内側から跳ね上げ、一気に投げた。いわゆる内股という投げ技である。

わけが分からぬまま投げ飛ばされたヴァレリーは、背中から地面に落ちた。初めて体験した投

げ技に目をキラキラさせる。

「え……なんだい今の技？ 重心移動だけで投げられたような気がしたけど。見たこともないよ、

どこの流派？」

「天神真楊流——ただの柔道の技よ。言っておくけど、私はこれしか知らないからね。他の技を聞く出そうとしても無駄よ」

どうせ理解できるはずもないだろうと、ナディは適当に答えた。

最初の人生で地球にいた頃に身につけた技術だから、異世界出身のヴァレリーに馴染みがないのは当然だ。そもそもこちらの世界には、投げ技を専門にした武術なんてない。

「ああ、ナディ。やっぱりキミは最高だ。いつでもどこでもどんなときも、ボクの想像をはるかに超える。そんなキミに、無限の愛を捧げよう」

そう言いながら両手を広げ、じりじりと近づくヴァレリーを牽制し、ナディもまたじりじりと距離を取つた。双方の温度差がひどい。

傍から見るとじやれ合いのようないつも二人のやりとりを尻目に、レオノールは鍋に蓋をし、スープを温め直す。

「今日も平和」

そして、元両親の痴話喧嘩が終わるのを待つことにした。

さて、空を飛んだナディはいくつかの情報を掴んだ。

まず、この草原は現在地から南北に十キロメートル、東西に二十キロメートル程度続いているということ。

草原の果ては四方とも崖がけで、はるか下方には樹海が広がっている。その面積は目測不可能であつたこと。

そして最後に、崖下に広がる樹海の南側にバカデかい巨木が見えたが、知的生活を営む種族の生いとな活圏かつけんは確認できなかつた、ということであつた。

「つまり、ここはどこかの山頂なんだね。そこが平原になつてゐるなんて珍しい」
「どうりで空気が薄い。うすこのままじゃお湯がきちんと沸かなくて美味しいご飯が作れない。それはとても大変」

物珍しげに周囲を見渡してヴァレリーが感想を述べ、真理を突いているがちょっとズレた危機感を抱くレオノール。

きつとこの場に某ガチムチなギルマスがいたらツッコミを入れていただろうが、残念ながら彼は不在である。

「とりあえず、軽く探索してみようかな。安全を確認しないと安心して休めないし」

ちよつと落ち着いたナディイが、魔法で食器を綺麗に片付ける。ちなみに、これも【逸失魔法】であり、バレたらいろいろ大騒ぎされる技術なのだが、三人はまつたく気付いていない。

そんな常識外れなナディイたちではあるが、探索に関しては定石どおり情報収集から開始——
【魔法範囲極大化】マジンマイソーラー・タクシング【望遠視】ワドウイシブ【広角視】センス・エキスパンション【敵性感知】センス・エネミー【探知】デブリクト【鑑定】アブレイザル。……敵性存在は探知され

ないわね。でも、東側にちよつとした岩山……？ 空間が歪んでいるように見える場所があつて、そこに何か生物？ 無機物？ とにかくそんなのがいるわよ」

——したものの、一応セオリーに則つていて、でも常識からかなり外れた魔法で片を付けてしまつた。曖昧な報告をしながら、常識なんか知つたこつちやないと氣にしていないナディイである。

マジなサバイバルとなれば、油断は死に直結する。外聞がいぶんを気にしてなんていられない。

よつて、ナディイは本格的に本気を出した。

とはいゝ、目測や探知魔法では現地の詳細な状況は分からぬ。
相談の末、三人はまず東の果てを目指すことにした。
それでも現地点から直線で十キロメートルはある距離だ。外部魔力の利用が不可能であるため、一行は魔法消費を極力抑えつつ、徒步とほで移動を開始する。
ところが……

「お姉ちゃんごめんなさい。レオが小さいせいでは足を引っ張っちゃつてる」

まだ幼いレオノールの体力が早々に尽きてしまい、ヴァレリーに背負われての移動となつた。

本人は申し訳なさそうにしているが、こればかりはレオノールが悪いわけではない。

ナディイもヴァレリーも彼女が謝るたびに気にしないよう伝えているのだが、それでも気になつてしまふのは仕方がないだろう。

もつともナディイたちは、レオノールに頼られて悪い気分はしていない。

「そんなに気にしなくていいのよ。というか、レオはもつと私を頼つていいの。赤ちゃんの頃から

ずっと手がかからなすぎて、お姉ちゃんは逆に心配だわ」

「ああ、レオをまたおんぶできるなんて夢のようだ。なんなら、これから移動はずつとこのままで全然構わないよ。むしろこのままがいい」

親バカ全開で世話をしたがる二人である。

レオノールはかつての第一子であり、早世した娘の生まれ変わりだ。

甘くなるのは当然で、誰でもそうなるだろう。

「レオは早く大きくなりたい。そしてお姉ちゃんの役に立ちたい」

ヴァレリーの背で拳をギュッと握り締め、レオノールが呟く。背負っているヴァレリーはもちろん、隣にいるナディにもばっちり聞こえた。

その言葉に、二人の反応はというと……

「ウチの子、ヤバいくらい可愛いんだけど！　え、何？　レオってば天使みたい。いや違う、まさしく天使そのものだよ！」

「何を言つてるんだい、ナディ。レオが天使だつていうのは当然でしょ。いや、もはや女神かも知れない。ああ、どうしてウチの娘はこんなに可愛いんだ！」

親バカつぶりが炸裂しまくついて、レオノールはさすがにちょっと引いた。

まあ、元両親にこれほど愛されているのは単純に嬉しいわけで。ヴァレリーの背に顔をうずめてニンマリしていたのは、二人には言えない秘密である。

そんな親子のコミュニケーションを取りながら、ナディたちは気になつた東の岩山？ を目指す。

景色が変わらない場所を延々と移動するのはストレスが溜まるため、目標地点を据えて移動したほうが精神的に楽なのだ。

もつとも、三人は同じ場所を延々と歩かされたくらいで疲弊するほどヤワではないが。

移動すること約二時間。一行はナディが魔法で発見した岩山らしき場所に到着した。遠目には岩山に見えていた地点だが、間近に迫つてみると明らかに違う。

岩肌を構成する鉱物は透明度が高く、透過する光を屈折させている。

こうした光の屈折のせいで、空間が歪んでいるかのように見えていたらしい。

そう。それは天然の光歪曲彫彩となつた、巨大な水晶の塊であつたのだ。

透き通る水晶がそそり立つ様を目の当たりにして、さすがに言葉を失うナディたち。

だが、そこから湧き出る魔物の群れを見て、さらに言葉を失つた。

「お姉ちゃん。こんなに絶景なのはどうして絶望が湧いて出るの。レオがつかり」

「ああ、うん。そうね。それはそう。まあでも、アレを見て大騒ぎするほど私もレオも恵まれた環境じやなかつたし。遠慮なく殲滅できるわね」

「うん。ボクも大騒ぎはしないな。だけど、なんでわざわざ水晶の外殻を持つているんだろうね」

レオノール、ナディ、ヴァレリーはそれぞれそんなことを言い、特大のため息をつく。

美しい巨大水晶。その陰から湧いて出てきたのは、同じく透き通るほど綺麗な水晶の外殻を持つ、無数のゴキブリであつた。

なお、正式名称はクオーツ・ローチという。近親種に美しい緑色のエメラルド・ローチ、目が覚めるような青色のサファイア・ローチ、燃える炎の赤色のルビー・ローチ、無色透明だが光を複雑に乱反射しさらに高硬度なアダマス・ローチなどがある。

目の前に現れたクオーツ・ローチをはじめ、どれも全部体長二メートル超えの魔物だ。碎いて適切な大きさにカッティングすれば、貴婦人がこそつて買い求める貴金属の素材になる。原料がゴキブリなのは秘密だが。

「ねえ。あんた、「剣の墓標」で一掃できる?」

【収納】から自前の小太刀——『凍花』と『灼花』を出して逆手に持ちながら、ナディイはヴァレリーに聞いた。彼がわずかに思案し、頭を振る。

「迷宮内では外部魔力があつたからいけたけど……この場の薄い魔力じやあ、自前を使わなくちゃならないから厳しいかな。ボクの愛剣があれば話は別だけどね」

「愛剣?『グルーム・ブリングガ』のこと?」

「そう。さすがに【魂の継承】で前世の能力を覚醒させたとはいえ、魔王の頃の持ち武器まで継承するのは無理だったなー。ああ、もう一度と逢えないんだろうなあ……でも、アデリーリーとともにあるとと思うと溜飲も下がるよ」

遠い目をするヴァレリーの横で、ナディイが【収納】を漁る。

「アレがないとボクは本気が出せないんだよ。何しろボクの半身とも言うべき剣だからね。実際は剣の形をした杖なんだけど」

「それならあるわよ、ほら。なぜか私の【収納】に入つてたから」

「でも、今生は世界を相手に戦うわけじゃないし、半身どころかボクの全部は今やナディイのものだからなくとも別に……って! なんで持ってるの!?」

今日一驚く元魔王様である。いや、前世も含めて過去一驚いたかもしれない。

「知らないわよそんなこと。そもそも魔王城の宝物庫に封印したはずの『凍花』と『灼花』が【収納】にあつたことだつて驚きだつたし」

「レオの【収納】にもアデライド母様からもらつた剣が入つてた。あれもレオ以外に使い手がいいから宝物庫に封印していたはず」

「へえ、レオのも。不思議なことがあるんだな……あ」

不可解な事象に首を傾げていたヴァレリーが、何かに思い当たつたのか視線を泳がせた。その仕草は、前世で何か隠し事をしていたときの癖とそつくりだ。

ピンと来たナディイは、ジトツとした視線を向けた。

「……で、清明を聞きましようか?」

カサカサと集まり、警戒するように様子を窺うクオーツ・ローチを尻目に、ナディイは詰問した。

「実は、あのがそうなつて……」

「え? 何がどうなつたの?」

「だから、こうなつて……ねえ?」

「んんん？ 何を言つてるのよ」

「それで、ああなつて……」

「は？ ちょっと待つてよ」

「……というわけなんだよ」

「分かるか！ どういうわけなのよ、全つ然分からぬわよ！」

「ごまかすつもりなのか、はたまたよほど説明が難しいのか、とにかく言葉を濁すヴァレリーであつた。説明が下手どころの話ではない。

「えーと、レオの【ストレージ】には自分の剣が入つていたんだよね？」

「そう。でもレオは入れた記憶がない」

ヴァレリーの確認に、レオノールがそう答える。ナディはなんとなく事の経緯を察してしまつた。「あのね、レオ。実は前世のあなたを埋葬するとき、みんなで相談して棺の中に武器を一緒に入れたのよ」

言いづらそうに、ナディが告げる。いくら前世のこととはいえ、自分の埋葬されたときの話を聞かされるのはいい気分ではないだろうと思ったのである。

「そうなんだ。なるほど理解した。だからレオの所有物扱いされて【ストレージ】に入つていたんだ」

ところが、当人の反応はあつさりしたものだつた。あくまで前世の出来事であり、現世とは関係ないと割り切つていていた。

(そういうえば私もそうだつた。前世のことはあくまで過去だし、いつまでも引きずついてもね)

内心で独白して、ナディも思考を切り替える。
続けて、ヴァレリーへ視線を移した。

「で？ 私のほうは？」

「あ、うん。実はね、アデリーラのときも棺に『凍花』と『灼花』を入れようつて、子どもたちと話したんだ」

「へえ。だからレオと同じことが起きたんだ。でも……それはあんたの剣まで入つていた理由にはならないわね……って、もしかして、入れたの？ 宝物庫に厳重に封印していたのに？」

「えーと……うん。入れた」

「なんでものを入れるのよ！ 宝物庫からなくなつたのに、まさか誰も気付かなかつたの!? どれだけ警備がザルなのよ、まったく！ そもそもあんな物騒な剣が棺に入つていたら、普通は気付くはずでしょ!? どうしてあんな禍々しいのを入れたのよ!!」

「いやあ、気付かれないようにしたからね。厳重に封印して、アデリーラの亡骸の背後に置いて、周囲を白と淡いピンクのバラの花で埋め尽くしたんだ。ボクの半身はこれからもアデリーラとともにありますように、という願いを込めて。それと、禍々しくないよ。光沢のある漆黒の十字で、刀身に楔形紋様が彫金された綺麗な剣じやないか」

「魔力が刀身を這つて蠢くから禍々しく見えるのよ」

前世の夫がやらかしたことか白日はくじつの下にさらされ、頭痛がひどくなつてくる。

ナディの行動のせいで、現在の彼女以上に頭痛の種を抱えているガチムチなギルマスがいるのだ

が、それは棚上げしていた。

「あんたねえ、される身にもなってみなさいよ。つたく……」

しかし、過去のやらかしに今さら言及したところでどうにもならない。そう考えて自分を納得させたナディイは、【ストレージ】から取り出した『グルーム・プリンガー』を渡した。

片膝をついて恭しく剣を受け取り、ヴァレリーが笑みを浮かべる。

彼の笑顔を見たナディイは、やっぱり魔王だなーと感慨深く頷いた。
その表情を、邪悪だとは思わない。どこか欲しかったものを手に入れた子どものような無邪気さがあつた。

「ああ、ああ、ナディイ、ナディイ！ やっぱりキミは最高だよ！ ボクはキミ以外の伴侶なんて考えられない！ 愛してる、この世の誰よりも何よりもキミを愛し、そして永遠に添い遂げよう！」

「…………うわあ。なんていうか、うわあ……胃もたれするくらいに重いわあ」

左手に持つた『グルーム・プリンガー』を掲げ、情熱的に宣言するヴァレリー。言われたナディイは盛大に引いている。

愛を語られたとて、すべての女性がキュンとするわけではないのだ。

「そういうえば、なんであなたまで生まれ変わっているのよ。仮にも『不滅の魔王』だつたでしょ？ 死んだつて復活していたのに、おかしいじやない」

「え、今頃？」

場違いなことを聞いて、当然の返答をされるナディイだった。

だが、彼女としても、再会してすぐ抱き締められたり、見知らぬ土地に転移させられたりといったトラブルが続き、疑問を解消するタイミングを逸していたという理由がある。

「不滅でも死なないわけじゃないんだ。それに、アデリーヌがいなくなつた世界に希望を持てなかつたから」

不死を殺すのは退屈と絶望だとは、よくいつたものである。

それはともかく。

ナディイから『グルーム・プリンガー』を受け取つたヴァレリーは、愛おしげに刀身を撫でた。
【剣の墓標】

眩くと地面に落ちた剣の影から無数の刃が伸びる。影が落ちていない地面からも同じように伸びたそれらは、ゴキブリを残らず刺し貫いた。

ナディイは、魔物を殲滅してなお、まるで子どものように無邪気な笑みを浮かべているヴァレリーは、まさしく魔王だと理解する。その姿を目の当たりにして、なぜか胸が高鳴つた。

「どうしよう、レオ。私、ちよつと胸が苦しい。心不全かな」

「お姉ちゃん……」

「ヤバいなー。病気にかかつたらすぐに治すし、予防もちゃんとしているつもりだつたんだけど。

【大治癒】【持続治癒】【完全回復】【体力賦活】

「…………お姉ちゃん……」

ナディイはそういつた感情に疎い。転生を繰り返してきたこれまでの人生を振り返つてみても、四

度目以外、浮いた話は一切なかつたのだから筋金入りだ。
それに魔王妃アデライドのときだつて、恋とか婚約とかお見合いとかがしたかつたわけではない。亡命した

先の魔王に求婚され続け、根負けした結果でこうなつただけだし。

（うん。犬のご飯にもならないからとおりあえず放つておこう）

そう心中で独白し、レオノールは「ひーはー」と特徴的な深呼吸するナディイからそつと目をそらした。

「殲滅したよ。死骸が消えないところを見ると、やつぱりここは迷宮じゃないね」

一方、『グルーム・プリンガー』を体内に格納したヴァレリーは、一撃で屠つた無数のクオーツ・ローチを見てそう感想を漏らした。

迷宮に棲息する魔物は、倒されると魔結晶やその他のアイテムをドロップして消えてしまう。その報告を聞いて我に返つたナディイは、無数に転がっているクオーツ・ローチを見て思考が一気に現金になつた。

「メチャクチャ高純度の水晶ね。これ、原型をなくすくらいい碎いて宝石商に売りつければ一財産作れるわ。これを高値で買った貴族貴婦人どもが、もとがアレだと気付かずドヤ顔で着飾る様を想像するだけで、特大バゲットが粒で三本はイケるわね！」

発想が鬼畜である。

ちょっととナイわーと言われそうなことを淫刺と宣うナディイを見て、レオノールとヴァレリーは――

「見栄全開で高級宝飾を買い漁る貴族から合法的に金銭を得る。口クデナシの優越感を踏みにじる庶民の味方。さすおね」

「ああ、それは痛快だね。中身じやなくて、見てくればかりを飾る誇り高そうなバカどもにはお似合いだ。よし、絶対に売り飛ばそう」

ものすごくいい笑顔で全肯定した。元親子で元夫婦なだけあつて、息がピッタリだ。

そうして、無数に転がっているクオーツ・ローチをナディイは笑いながら二刀の小太刀で切り刻んでいく。

「ああ、イイわー。水晶をゼリーミたいに簡単に切り刻める『凍花』と『灼花』はやつぱりイイわー。それに、ちようどいい鍛錬になる」

ちよつと危ない感じで悦に入るナディイ。

「久し振りの愛剣だし、ボクも勘を取り戻さないとね。……うん。この感覚、とてもいいよ」

ヴァレリーも手伝い、無数に出した影の刃でゴキブリをいろいろな大きさにカツティングした。

ちなみに、このゴキは中身も外身も全部水晶でできているため、余すところなく素材として使える。

どうやつてカサカサしていたのだろうとか、精神衛生的によろしくない絵面を考えてはいけない。

「ナディイ、もっと『イイわー』って言って。できれば吐息と一緒に囁くように」

「ちよつと止めてよ変態！」

少々危ない発言をして、ナディイにやつぱり却下されていた。

しかし、ナディに冷たくされるのは嫌いじゃない、少々アレな趣味のヴァレリーだつた。

そうした作業を終えて、戦利品のクオーツ・ローチの素材を残らず回収し、三人は一休みする。その場で竈を作つて軽食をとり、腹搾えをしてからさらに先へ進んだ。

なお、メニューは焼いたロブスターにホワイトソースを和え、千切りした葉物野菜を敷き詰めたパンに挟んだサンドイッチである。アクセントとして、パンにマスタードを塗つておくのがポイントだ。

余談だが、ナディとレオノールが苦手とする焼きカニ味噌みそと焼きエビ味噌をヴァレリーに食べさせようとしたところ、分かりやすくいやあな顔をされた。やはり家族は食の好みも似るのだろう。

そしてさらに歩くこと二時間。三人はついに草原の果てに辿り着いた。

地面が途切れ、そこから下は切り立つた断崖になつてゐる。うんかい雲海が広がつており、地上を見通すことさえできない。高所が苦手な方々は、ちょっと吐きかねないような景観であつた。

だが、これは予想の範囲内。高所程度では心が折れない三人である。

ただ、体力が尽きていたレオノールはもちろん、迷宮での戦闘などで魔力枯渇を起こしたナディもまた疲れていた。そこで、今日の探索は打ち切つて休むことにする。

もつとも魔力枯渇に関しては、誰かさんが接触行為をして譲渡したため問題ない。別の意味では問題大ありだが。

幸い、食材は『結晶鋼道』でドロップした魚介が大量にあるし、この草原にも可食な野草が結構

ある。ここまでの中でもアーナ薬草が生えているのを、ナディが見つけていたりもした。

徐々に陽が傾き、あたりが暗い紫紺に染まつていく。

草原に寝転がつていたナディとレオノールは、疲労のためかそのまま眠つてしまつた。

その姿を愛おしそうにヴァレリーが見つめ、【収納】ストレージから毛布を取り出して彼女たちにかける。

そして彼は『グルーム・プリンガー』を抜いて地面に突き立てた。

このとき、予想よりも刀身が地面に突き刺さらないのに違和感を覚えたが、それより二人の安眠が優先だ。

【影の拠点】
[シャドウベース]

唱えると大量の影が生じ、ナディとレオノールを中心とした簡易的な影の小屋を作り出す。

「うん。まだ全盛期にはほど遠いな。でも、今はこれで十分だろう。誰と戦うわけでもなし。ボクはね、ナディ。キミと大切な妹を守ればそれでいいんだよ。あとは何も——」

いらない。そう続けようとしたがわずかに考え、気を取り直して言い直す。

「……でもナディとえっちしたいなあ」

深いため息をつき、彼は少し離れたところで横になつた。

カツコつけようとしても、結局は思春期じみた衝動が漏れ出るヴァレリーであつた。

(ばーか)

微睡まどろみみの中で獨白を聞いていたナディは、声に出さずにそう呟く。

ナディとレオノールの長い一日は、こうして終わつたのである。

時は少し遡り、ナディたち三人が、突然草原に放り出されて呆然としていた頃。
『クリスタル・マイク』の深層。迷宮とは切り離されたところにある場所で、巨大な魔法装置を前にした男は冷ひや汗をかいていた。

(危なかつた……)

複雑怪奇な魔法文字が羅列している装置を操作しながら、独白する。

本日未明、自身が保護する「彼」の魔力が、今までにはどの高まりを見せた。
これほど反応は十二年前と十一年前以来三度目だが、今回は過去二回を上回る反応であった。

(ついに目覚めるのか)

そう思つた男は装置を操作し、「彼」の魔力排出を手助けした。

ところが、「彼」は目覚めなかつた。何かに反応し、一時的に魔力が高まつたにすぎなかつたらしい。

よつて魔力を「彼」に戻そうとしたが、一度出たものは戻せない。

仕方なく魔力に指向性を与える。男が管理する迷宮内——『クリスタル・マイク』へ放出するしかなかつた。
まあ、それが原因で迷宮氾濫が起きたわけだが、それもようやく抑え込めたらしい。

男がこの地に来て、複雑怪奇な装置を発見して、五十年ではきかないほどの年月が経過していた。

それほど時間かけてなお、いまだにこれがどういう仕組みなのか理解できない。
だが理解はできなくとも、目的は予想できる。

この装置が接続されている先。そこには直径二メートルはある、滑らかなクリスタルガラスのような素材でできた球状の水槽があつた。

水槽の中には、男が看病する「彼」——漆黒の髪を持つ魔族の青年が、己の身を抱えるようにして浮いている。

どんな構造なのか不明な水槽には、出入口もない。完全に密閉された中で、青年は保存されるかのように浮いている。

その反応で分かる。「彼」は、明らかに生きている。
長い年月をかけて装置を観察した男は、これはきっと「彼」になんらかの治療を施すためか、もしくは「彼」を生きたまま未来へ残すためのものだと結論づけた。

何より、「彼」の髪色。

魔族の多くは暗色系の髪色と、濃淡の差こそあれ金の瞳を持つ。
そんな中、魔族の王族は全員が漆黒の髪だ。今は亡き魔王ヴァーレリアは、藍色の髪であつたらし

いが。

装置に浮かぶ「彼」は夜闇のような漆黒の髪をしていた。

間違いなく「彼」は王族、またはそれに連なる者だ。

そう考える男もまた、暗灰色の髪と赤混じりの金色——赤金色の瞳を持つ魔族である。

強靭な身体能力と高い魔力親和性を誇る魔族。しかし男は戦闘能力に乏しく、その反面、魔力の運用や装置の開発といったことに特化していた。

男が得意とする力はどちらも、脳筋率が驚異の九割九分を占める魔族の中では評価されない。

時代が時代なら、あるいは魔王ヴァレリアの寵姫が存命であつたなら、きっと正しく評価されていたであろうが。

だから居場所を失つて、男は魔族領を飛び出した。

そうして放浪しても、世の脳筋率は意外と高く、遭遇率も高い。

たちの悪いことに、脳筋は世話好かないヤツ多かつた。男にとっては大迷惑であつたが。

人目を避けるようにして放浪の旅を続け、男はやがて廃坑跡にある無人の廢村に辿り着いた。

迷わず、すべてから逃げるように廃坑へ潜つた。人との関わりに疲れ、知らず、死を望んでいたのかもしれない。

そう望んでいても、魔族の強靭な肉体は簡単には壊れない。

抵抗力が凄まじいためヒト種に比べれば状態異常になりづらいし、魔族特有の疾患でなければ病気にも罹患しづらい。

それに魔力さえあれば、水だけで生存可能なのだ。

魔族はチートな種族だった。

自身の種族を恨めども、彼もやはり魔族。死ねるはずもなく、ただ廃坑を彷徨う日々が続いた。そうして廃坑に潜り、年月を忘れ去るくらいの時間を一人で過ごした果てに、ついに見つけたのだ。

「彼」が眠る魔法装置を。

発見したときにはこの魔法装置は停止寸前で、本来「彼」に供給されるべき魔力が外部に漏れ出していた。

そのせいで、人を避けるように潜つた廃坑も迷宮化しかけていたらしい。

男は無作為に放出され周囲を侵食する魔力に、自身の持つ知識の限りを注ぎ込んで指向性を与えるとした。

当初はうまくいかなかつた。

しかし、各地を放浪していたときにたまたま立ち寄つた、ガラクタじみた謎の物品を展示している小さな民家……そこで目にしたとある覚書を思い出し、藁をも掴む思いで魔術に転用して装置の効果を上書きする。

結果的にその判断が功を奏した。完全とはいかなまでも、装置が正常稼働を始めたのである。

なお、不思議な民家の所在地は、四方を山脈に囲まれた広大な盆地の中心。農耕が主産業である

辺境の村——グレンカダム。

寂れた民家を、高位の森妖精らしき男が維持・管理していたのだ。

「愛しい愛しい宵闇の空のごとく美しい髪の君へ……愛を愛を愛を——」と笑みを浮かべて言ひな

がら何かを書き綴つてゐる、怪しく、危なく、氣持ち悪い人物であつたが。
それはともかく。

装置が安定稼働し始めたことで安堵した男は、そこに使われている高度な技術を目の当たりにした。そして、己の知識と技術をさらに高めたいという欲求を抱いた。

すべてを諦めて死を選ぼうとしていた男が、唯一捨て切れなかつた願い。

(この装置を使って、『世界』を創つてみたい)

放浪の日々は、何も辛いことばかりではなかつた。筋肉との闘争は苦痛でしかなかつたが、それはさておき。

旅で目にした美しいもの。楽しかつたこと。嬉しかつたこと。

そうしたすべてを、ここに満ちる魔力があれば創造できるのではないか。

「僕は自分の『世界』を作りたかったんだ」

何も言わない、答えない、動くことすらしない「彼」に語りかける。

「その願いが叶つた果てを、目覚めたあなたと見てみたい」

水槽に浮かぶ魔族を親愛の表情で見つめながら、男はそう呟いた。

そしてふと、思い出す。

(それにして、あの少女たちはなんだつたんだ？ ヒト種だよね？ 迷宮が氾濫しているんだよ、普通は逃げ一択でしょ)

男は迷宮を維持・管理する装置に組み込まれている、迷宮内を把握する魔術陣に触れることで、

『結晶鋼道』の状況をつぶさに観測することができた。

そちらを一瞥し、数時間前まで嬉々として魔物を狩りまくつていた少女二人組を思い起こす。

最後は、数千匹のセレストアントの大群にたつた二人で立ち向かうという無謀をしてかした。

当然追い詰められていたが、突然現れた黒衣の男が、氾濫で強化され数も膨大だつた魔物を瞬殺するという非常識をやつてのけたのである。

(いや、ありえないでしょ)

このままでは、あの三人が自分たちがいる隠し場所まで到達してしまう。

男だけであれば逃げようがあるが、もし「彼」を見つけてしまつたらどうなるか。

ヒト種と魔族は、現在では確執がないとされている。だが、一部のヒト種は相変わらず魔族を廃絶しようと企んでいると聞く。

(もし、彼女たちがそだつたら……)

なぜか装置に最初から組み込まれていた力を使い、現在もここと繋がつてゐる座標不明の彼方へと三人を追いやる。

本当は繋がりを断ち切りたかったのだが、どうすればそれができるのかが分からない。だから

【転移門】を隠し、破壊困難な迷宮の壁で塞いで道を閉ざした。

(これで、「彼」に危険が及ぶことはない)
そう考へる。だが慎重というか臆病というか、彼の性質がそれで終わることを許さなかつた。

「……そうだ、**守護竜を創ろう**」

放浪先で聞いた、赤金色のハンターと災厄級魔龍『燃え爆ぜる皇帝竜』との戦いの伝承。男は静かに、だが激しく心を震わせて構想を固め、創造始めた。

——家族を守るために。

一章 地平線を越えて

ヴァアレリーが作り上げた【影の拠点】で目覚めたナディイは、影という材質ゆえかいまだ薄暗い室内を寝ぼけ眼で見回した。

隣ではレオノールが毛布にくるまつて寝息を立てている。

「はひゅふう！」

その愛らしい寝顔を見たナディイは、ちょっとと言語化しにくい吐息を漏らし、だらしない笑みを浮かべた。

（ウチの妹、マジ天使！）

目覚めた直後からシスコン全開である。

レオノールを見てひとしきりクネクネしていた彼女だが、息を整えて外に出る。

小屋の外にはすでに起きていたヴァアレリーがいた。

昨夜のうちに作つておいた籠に火を入れて、真剣な表情で何か調理しているようだ。

「おはよう、ヴァル。ずいぶん早いね」

背伸びをしながら声をかけ、ナディイは朝靄が立ち込める草原へ目を向けて首を傾げる。

（標高が高いところって、空気が乾燥しがちだから朝靄つてそうそう出ないわよね？ 夜のうちに

雨が降ったわけでもないのに。やつぱりここって、なんかおかしいな)
そんな疑問が浮かぶ。

しかし、突然転移させられた謎の場所に一般的な気象の常識が通用するはずがないと判断し、考
えるのを止めた。

そうして一人で納得しているナディに気付き、ヴァレリーがこちらを一瞥して微笑みを浮かべた。
逆光で確認しにくいが、彼はなぜかピンクのフリルをあしらつたエプロンを身につけ、四角いフラ
イパンを振っている。

今すぐにでも駆け寄りたそうだが、調理中なので動けずにいるらしい。尾骶骨びていこつのあたりから生え
る尾おが激しく振られている幻覚が見えた。

「……何を作ってるの?」

真剣な表情に興味をそそられたナディは彼に近づき、その手元を覗き込む。

ヴァレリーが作っていたもの、それは玉子焼きだつた。

「アデリーゲ作ってくれたのを思い出してね。記憶を頼りに焼いてみたんだけど……意外と難し
いね」

そりやそうだろう。

そう思つも口には出さず、ナディはところどころ焦げていて形も歪いびきなそれとヴァレリーを交互に
見る。

だが、記憶を頼りに多分初めて作ったにしては、なかなかの出来だ。

玉子焼きを皿に移し、手早く切り分けていくヴァレリーに言う。

「初めてなんですよ。上出来だと思うけど」

満更でもない表情で口元を押さえる彼をよそに、ナディは屈かがんで玉子焼きを摘み食いし、首を傾
げる。

「あ……まあ、いいか。どうかな?」

それに気付き、ヴァレリーが感想を求めてきた。

「ねえ、これって入れたのは塩だけ?」
ナディは摘まんだ指を舐なめながら聞いた。
ヴァレリーが若干戸惑いながらも答える。

「え? そうだけど」
すると、ナディは小さくため息をついた。腰ひざを伸ばして立ち上がり、正面からヴァレリーを見上
げる。

「さつきも言つたけど、初めて作つたにしては上出来だわ。むしろどうしてこんなに美味うまいいんだろ
うつてくらい。だけどね……、玉子焼きなら味付けはお砂糖さとうでしょ。分かつてないわね」

魔王妃は、甘い玉子焼きをご所望だつた。
なるほどと頷くヴァレリーである。だが、彼にも理由がある。